

研究ノート

## 1950年代韓国小説の形成について

——既成世代と新世代の葛藤を中心に——

世古口 真

### 要 旨

1945年8月15日解放以後の左右イデオロギー対立と国際情勢での冷戦体制強化の中で、1950年6月25日に朝鮮戦争が勃発した。この戦争は1950年代の韓国全般を規定する重要な条件になった。その悲劇性は同民族相争うという未曾有の惨状から始まる。この戦争によって民族の‘生’を荒廃させ、民族史的悲劇の現状として、分断の固着を決定させ、さらにイデオロギーの硬直化、政治的跛行性、経済また文化の沈滞など、すべての分野の発展に立ちはだかった重要な要因になった。従ってこの朝鮮戦争を体験した1950年代の文学は、戦後意識の自覚による民族の悲劇を克服しようという意志で現れ、課題もやはり戦争の傷を克服するところに集中する。この時期の文学が解放から今日に至るまでの韓国現代文学の出発点であるといっても過言ではない。その出発点という重要性を持つ1950年代の小説がどのように形成され、またどのように展開していったのかを既成世代作家と新世代作家との摩擦、葛藤という観点から考察した。

キーワード： 朝鮮戦争、戦後、既成世代、新世代、拒否、否定、民族文化論、西欧文学精神

## I

本稿では、今日の韓国文学が形成される初期段階とみられる1950年代小説<sup>(1)</sup>について注目する。開化期<sup>(2)</sup>以後、日帝植民地時代が終わるまで韓国文学は、一つの歴史的段階を持った。そして解放<sup>(3)</sup>になり、韓国は分断時代という名で、また一つの歴史的段階を経験する。1950年代といえば、ちょうど6.25<sup>(4)</sup>から4.19<sup>(5)</sup>までその政治史の性格が一段落する時期である。戦争が起こると、新しい生存の問題が引き起こった。それは総体的悲劇と称される分断状況それ自体の始まりである。1960年の4.19はこのような問題に対する変化に一線を画したという点で、また一つの分岐点になった。4.19は政治的に李承晩政権の崩壊を意味するが、これを契機に自由主義の胎動はもちろん産業社会の転換期にまで可能になったためである。

1950年代小説に注目する理由は、西欧文学との接点にもある。それは開化期小説に続き、韓国現代小説が経験した2回目の近代化作業に該当する。一度目の近代化作業は、それが西欧の近代物質文明との接点を前提にしていながらも、一方日帝時代という歴史的特殊性には決して目を背く事が出来なかった。最初から最後まで、それはその中でのみ生まれ、育ったものである。終わってすぐに分断の時代が始まった。その時代を開く新世代作家<sup>(6)</sup>たちが6.25以後に出てきて、その新世代精神とは、他でもない第2次世界大戦以後、西欧文学精神との接点であった。それがまた分断という状況と運命を共にしながら今日まで続いている。

この時期の韓国小説を、‘戦後小説’または、‘分断小説’<sup>(7)</sup>という言葉で呼んできた。戦後小説とは、時期を念頭においた言葉であり、分断小説とは、時期より性格により重点をおいた言葉である。そのためか戦後小説とは、6.25以後、その時期が制限された感がなくはなく、分断小説とは、その時期が解放直後から今日まで、あまりに広範囲になっている感がある。分断の時代はまだ終わっていないまま今日まで継続されているためである。本稿では、そのままそれらを‘1950年代小説’と呼ぶ事にする。この時期の小説がどのように形成され、またどのように展開されたのかを明らかにする事により、今日の韓国文学を理解し、体系化する土台を築く事になるからである。

## II

1950年代作家たちは、その活動時期により分類すると、次の4つになる。

①開化期初期から1920年代または、’30年代を経て、’50年代まで作品活動を継続してきた元老たちがいる。この時期、作家たちは大部分北側に拉致されたり、境界線を越えて、

## 1950年代韓国小説の形成について

北側へ行ったりした。または、戦禍を被り、死亡したとか、活動を中止したとかいう理由で多くはないが、朴鍾和、廉想涉、桂鎔黙、朴花城、李無影、田榮澤、李周洪、朱耀燮、等が残り、作品活動を続けた。

②1930年代後半に文壇登場し、①の作家たちと同時代を生きたが、しかし金東里、黃順元、安壽吉、郭夏信、金光州、金松、朴榮濬、李鳳九、鄭飛石、崔仁旭、崔貞熙、等は、彼らと区分する必要がある。新しい時代を開く意欲と態度が、それだけ積極的だったためである。

③1940年代後半に文壇登場したが、6.25で一時中断して、また新人として活動を始めた若い作家たちである。康信哉、朴容九、金聲翰、徐權培、孫素熙、吳永壽、孫昌涉、柳周鉉、林五仁、張龍鶴、崔泰應、韓戊淑、等だが、彼らはほとんど『文藝』『예술부락』(芸術文学)『白民』『新天地』『大潮』『民聲』等の雑誌を通してデビューしたが、6.25以後、再び新しく活動を始めた。

④休戦後、新しい文学雑誌が発行され、日帝末期一時中断されていた日刊新聞の新春文芸が再び復活したのも戦後文学を形成するのに大きく寄与した。1954年『조선일보』(朝鮮日報)が、新春文芸を再開してから、安東民、金光鏞、崔玄植、李丙求が登場し、『동아일보』(東亜日報)が、鄭然喜、干勝世を、『한국일보』(韓国日報)が、吳尙源、鄭漢淑、河瑾燦をデビューさせた。そうかと思えば、一方1952年に『戦線文学』が創刊され、1950年に『自由文学』が、1959年に『現代文学』『文藝』がそれぞれ創刊され、戦後、韓国文学を引っ張って行く牽引車になった。李範宣、朴敬洙、李浩哲、鮮干輝、吳尙源、朴景利、吳有權、金冠植、徐基源、等がこの時出てきたのだが、その前の金聲翰、張龍鶴、孫昌涉、吳永壽、鄭漢淑、金光鏞、等と共に、本格的な戦後新世代を形成する。戦争期の文壇形態は「文總救國隊」に圧縮される。それは主に、大邱と釜山等の避難文人たちにより組織され、その隊員たちがやっている事は、共産主義と対立し、戦う事であった。この時『戦線文学』が発刊され、9.28<sup>(8)</sup>修復されると散らばっていた文壇が再びその形を整え始めたが、しかしこの時期文学もまだ避難文学の性格から抜け出す事は出来なかった。ただ真正な戦争文学の必要性がこの時自覚された事は認められる。

‘愛国文学’と‘御用文学’の必要性が強調されたのもその時だった。共産主義文学に対立し、偉大な民族文学または愛国文学が新しく要求されたのだ。もちろん文学の本質と愛国文学それ自体までを混同したのではない。時期的に国家的な意義が強調された文学、祖国の危機を呼びかける文学、民族の将来のための文学に対する主張が文学の御用性にまで拡大された。このような主張は、上の①、②に該当する既成世代作家たちに主に現れ、そうすると③、④に該当する作家たちもこれに対立し、反論を提起するとか、無視するといった立場をとった。黃順元と金東里は、この時期に民族と文学という2つの側面から注

目される作家に選ばれた。彼らは釜山避難時の哀歎を好んで扱い、自分たちの文学が理念に偏る事なく健康な文学性を維持するように努力した。その中では、特に貧しさを主題にした世態描写や人間良心の墮落性を告発したもの、そうかと思えば貧しさと無秩序の中で、垣間見る事の出来る暖かい人情の世界が大部分であった。

「술 이야기」(酒の話)、「담배 한 대 피울 동안」(煙草一服する間)等、解放直後から作品を発表し始めた黃順元は、はじめは田園の家庭悲劇のような素材を好んで用いた。これは主に、農村の没落や落ちぶれた両班<sup>(9)</sup>たちの生活に注目したものとして郷愁濃い民族的色彩を表現しようとする黃順元固有の文学観に立脚したものである。しかし彼の文学は6.25を経て、より現実的な傾向に変わった。「母子」「曲藝師」のような戦後、現実的な関心が貧しさを主題にした世態描写や暖かい人情の世界を創出した。

金東里が1930年代の神秘的な態度を止揚し、現実に着眼し始めていたのもこれと時を同じくする。「黄土記」「巫女圖」の時期とは違い、解放になると彼はすぐ「穴居部族」のような作品で現実を洞察する作業を始めたのだが、6.25以後にも彼は「興南撤収」「密多苑時代」のような系列の作品を続けて発表した。「사반의十字架」(サバンの十字架)はこの時期に収めた彼の代表作であり、戦後韓国小説の里程碑になった。この小説は8.15(解放)と6.25のような民族的現実を人間中心の文学に昇華させたという点で特に注目に値する。사반(サバン)を主人公にする神と人間との関係、天国と地上との対立設定は戦後文学が取り入れた新しいリアリズムの成果である。民族と文学の調和を彼は信じた。文学の純粋性までも民族を離れては確保されない事を彼は主張し、それがまたリアリズム文学の実体である事を実証的に見せた。

### III

休戦以後、新世代作家たちが登場すると、このような民族文学論に対する立場も新しい批判と自覚が起こり始めた。それは既成世代に対する拒否形態に現れた。新世代作家たちの特徴とは、戦争場に出かけ、直接戦争を体験したという点である。それによって戦争の責任問題において既成世代と心理的な摩擦を醸し出した。新世代作家たちはもちろんその責任の所在を既成世代に押しつけた。戦後、既成世代の民族文学論というものも彼らはまさにその点で解釈しようとし、その民族文学論についての2世代間の葛藤もまさにここから生じたのだ。

既成世代の民族文学論をみると、

우리가 자국문학을 특히 민족문학이라고 부르는 것은 국수주의적 의미만을 가진 것이 아니라 최근 반세기 동안에 급격히 받아들인 외래문학에 자기의 고

## 1950年代韓國小説の形成について

유문화가 휩쓸려 들어가서 자기를 잃어버리거나 혼효될까 봐 민족의식의 양양과 민족혼의 새로운 발견 및 자각과 민족성…… 민족적 특이성을 고조, 선양, 표현한다는 의미에서 특히 〈민족〉 2자를 붙이어 부르는 것이거니와…… 그러나, 민족적 생활이 없었으니 민족문학이 있을 수 없었다.

(我々が自国文学を特に民族文学と呼ぶのは、国粹主義的意味だけを持つのではなく、最近半世紀の間に急激に受け入れた外来文学に自己の固有文化が荒らされ、自己をなくすとか混ぜ合わさってしまうかもしれないといった民族意識の高揚と民族魂の新しい発見あるいは自覚と民族性……民族的特異性を高揚、宣揚、表現するという意味から特に〈民族〉2文字をつけて呼んでいるのだが……しかし民族的生活がなかったのだから民族文学があるわけがなかった。)<sup>(10)</sup>

廉想渉は、解放以後をイデオロギーの混同が引き起こす新しい暗黒期と診断したようだ。そして、そのために韓国文学は左翼文学とのみ合いに苦しめられたというもので、だから6.25以後はより民族文学を強調するしかないという主張をした。反共文学を念頭に置いた事は明らかである。

新世代作家たちは民族文化論それ自体を発見する事はなかった。代わりに彼らは拒否と反抗を叫びながら、この世代の新しい精神を表現したのだが、それは既成に対する挑戦であり、現代精神それ自体に対する擁護であった。彼らはジェネレーション交替の厳肅性を叫び、否定と呼ばれる城を擁護し、反抗と反感の論理を展開し、そして現代文学40年の水準と無氣力を嘆いた。

제네레슨 교체가 항상 否定의 손으로 зах행되었다는 것은 역사가 증인이 되어 줄 것이다, 그러므로 우리는 부정을 획득하여 하루 빨리 제네레슨 교체를 진행 시켜야 할 것이다. 그것이 잔인하다거나 몰인정이다, 라는 이유로 타협하는 작가는 일평생 反感을 反芻하고 끝날 것이다. 잔인해야 한다라는 고대인간의 제네레슨 교체의 순간같이 역사적인 순간을 생각할 수가 없는 것이다. (중략) 이 땅의 문학의 현행상태를 타개하는 유일한 방법론은 오늘 우리가 부정을 획득한다는 것이다. 한 인간의 손짓에서도 우리는 비극을 窺知해둔다는 것은 아무리 그 세대의식이 심각하드래도 소득없는 일일 것이다. 그것을 체험한다는 사실이 그 체험 속히 고난에 찬 인증이 되고 반항의 聲火가 될 것이 아닐까. 20세기의 위기의 체험이 유일한 우리들의 방법론이라는 것은 20세기에 의한 패배를 의미하는 것이 아니다. 그것이 전통의 본질이었던 것이다, 拒否하고 反抗하는 來日의 작가와 詩는 오늘도 거부하고 반항하고 건설하지 않으면 안될 것이다. 우리는 오늘의 전부를 거부하고 기성에 대한 용감한 도전에서 내일을

형성할 것이다.

(ジェネレーション交替がいつも否定の手で執行されたというのは、歴史が証人になってくれるであろう。そのため我々は否定を確得し、一日も早くジェネレーション交替を進行させねばならぬ。それが残忍であるとか、人情がないといった理由で妥協する作家は一生涯、反感を反芻しながら終えるであろう。残忍でなければならぬという古代の人間のジェネレーション交替の瞬間のように歴史的な瞬間を考えられないのだ。(中略)この地の文学の現行状態を打開する唯一の方法論は今日我々が否定を確得するという事だ。一人の人間の手ぶりからも我々は悲劇を窺知しておくというのは、いくらその世代意識が深刻であっても得る事はないものだ。それを体験するという事実は、その体験の中の苦難に満ちた忍従になり、反抗の火種になるのではないか。20世紀の危機の体験が唯一の我々の方法論であるという事は、20世紀による敗北を意味するものではない。それが伝統の本質であったのだ。拒否し反抗する明日の作家と詩は今日も否定し反抗し建設しなければならない。我々は今日のすべてを拒否し、既成に対する勇敢な挑戦から明日を形成するのだ。)<sup>(11)</sup>

休戦以後、新世代文学論の台頭は開化期以来、西欧文学との関係から韓国文学が経たまた一つの大きな変化として記録される価値がある。既成世代たちがその間、日帝の清算と解放直後、混乱したイデオロギーの渦中ですべての民族文学の成立のため没頭している時、新世代作家たちはこのように西欧文学の精神に注目し始めたのだ。既成作家たちはもちろんこのような新世代精神に対し、強い不満を持った。既成作家たちが文学と政治を論議しながら現実積極的に対応しようと主張したのとは違い、新世代作家たちは戦争や政治に対し無視し続けたという事だ。しかしそれは新しい時代意識の発見であり、現実政治に対し背を向けたわけでも伝統の断絶でもなかった。彼らは大部分の既成作家たちが新しい認識もなく、従って悲劇の発見もなく作品を書いていると指摘しながらも、その中である伝統を認める態度がなくてはなかつたのだ。例えば金東里の文学から〈認識〉を指摘し、黃順元の文学から〈悲劇〉を指摘した点はその例である。金東里の認識は悲劇化されない線までの認識であって、黃順元の発見は認識によって指摘作業を行動する前の素朴な発見であるとみる見解がそれなのだが、それは伝統の断絶ではなく、一種の追求であった。

このような新世代文学論は、遂に知性とヒューマニズムの文学論にまで発展した。それは知性を知的な能力の所産として、ヒューマニズムを素朴な叙情と同じ感情の所産として把握した既成文学に対する反発から始まるのだが結局、知性とはヒューマニズムを支柱としたもので、ヒューマニズムは知性を土台し成り立っているという相関関係を解明しようとしたものだ。

원래 「휴머니즘」 이라는 것은 어떤 체계적인 思想이나 문학의流派가 아니고 人間性を 基底로한 批判選擇을 根本으로 삼는 人間精神의 자세를 의미하는 것으로 알고 있습니다. 인간의 정신인 이상 그것은 全人的 태도라 하겠읍니다. 그러므로 여기서 知性を 배제하고 감상적인 것만을 들어 「휴머니즘」 이라 이름을 붙이는 예는 寡聞한 탓인지 일찌기 본 일이 없읍니다. 단순한抒情을 「휴머니즘」 이라 한다면 蕡眞이나 杜子美는 으뜸가는 「휴머니스트」 일 것입니다, 그러나 우리는 이들을 「휴머니스트」 라고 부르지 않읍니다. 그레샤, 로마의 전통을 이어 르네상스에서 個我를 發見한 「휴머니즘」 은 20세기에 이르러 「社會」 를 발견하였다고 합니다. 인간과 인간성을 짓밟는 「팻시즘」 이 일어나자 유평을 초월해서 이에 항쟁한 兩次大戰間의 문인들의 共同의 기반이 「휴머니즘」 이었다는 것은 이미 상식화된 문제입니다. 그것은 단적으로 말해서 人間救濟의 절규였다고 하겠읍니다. 여기서도 우리는 「휴머니즘」 이라는 것이 詠嘆,抒情이 아니라 전인적인 노력이요 變轉하는역사적 현실에 대저해서 인간의 위치를 定立하고 必要한 때에 항거 분투하는 태도임을 짐작할 수 있으리라 믿읍니다. 이러한 마당에서 批判 断定 選擇등의 기능을 가진 知성이 前景에 나서게 됨을 말할 것도 없읍니다. 이같은 시대정신을 體得 把握하여 표현하는 문학자들 우리는 누구보다도 「휴머니스트」 라 하고 그 문학의 貯累를 「휴머니즘」 이라고 부르고자 합니다.

(本来「ヒューマニズム」とは、ある体系的な思想や文学の流派ではなく、人間性を基底にした批判、選択を根本にした人間精神の姿勢を意味するものであると認識している。人間の精神である理想、それは全人的な態度だといえる。そのためここで知性を排除し、感傷的なものだけを入れ、「ヒューマニズム」と名をつける例は寡聞なためなのか、かつてみた事がない。単純な抒情を「ヒューマニズム」というなら、蕡眞伊や杜子美は第一の「ヒューマニスト」でしょう。しかし我々はこれらを「ヒューマニズム」とは呼びません。ローマの伝統に続き、ルネッサンスにおいて個我を發見した「ヒューマニズム」は20世紀に至り「社会」を發見したという。人間と人間性を踏みつける「ファシズム」が起きると流派を超越して、これに抗争する兩次大戰間の文人たちの共同の基盤が「ヒューマニズム」だったというのはすでに常識になった問題である。それは端的に言って人間救濟の絶叫だったと言える。ここでも我々は「ヒューマニズム」というものが詠嘆、抒情ではなく、全人的な努力であり、變轉する歴史的事実に対処し、人間の位置を定立し、必要な時に抗拒、奮闘する態度である事を推し量る事が出来ると信じる。このような場で批判、断定、選擇等の機能を持った知性が前景に出る事になるのは言うまでもない。このような時代精神を體得、把握し、表現する文学

者を我々は誰よりも「ヒューマニスト」とし、その文学の底流を「ヒューマニズム」と呼ぼうと思う。)<sup>(12)</sup>

新世代作家たちのヒューマニズム論が「社会」の発見を土台にしているといつて、それが既成世代たちの社会的観点と同じものなのかといえば、そうではない。既成の文学が時代と民族を押し立てる反面、新世代作家たちは戦後の変転する歴史的現実注目し、人間の問題に力を置いたのだ。戦後直後に既成作家たちは皮相的ながらも戦争体験をよみがえらせようとした痕跡がなくはなかったが、すぐに避難生活の世態や市井描写を通じた歴史的事実に対する抗拒の態度をみせた。時間が流れるほど、このような傾向は多極化され、人間の省察や作品の構成力も優れ、戦後の文学は彼らによって活気を帯びてきた。

#### IV

休戦以後1960年代に入る前までに新しく文壇に登場した一群の作家たち、李浩哲、徐基源、呉有權、李文熙、崔仁勲、宋炳洙、崔一男、朴敬洙、崔翔圭、姜龍俊、彼らはそれぞれ自身の見解と手法が違っていても戦後小説のいろいろな問題をより深く発展させていった。宋炳洙と姜龍俊は彼らが体験した戦場を直接実感が出るように再現する事に熱中し、李浩哲と朴敬洙は失郷民たちが避難地に新しく根を降ろしていく生に注目し、徐基源と崔仁勲は分断の悲劇をより深く論理化し、崔翔圭と崔一男はそれぞれ個性のある文体を用い、戦後の窮乏した現実に注目し始めた。李浩哲は特に避難地で彼らが生の根を降ろしていく過程に執着した。「脱郷」は避難してきた若者たちが釜山の埠頭で彷徨する様を描いた生の風俗図である。しかし彼の彷徨は世俗的であるとか疲れない点が特徴である。彼の人物たちは、これから新しく世の中に出て生きていく若者たちである。「脱郷」で彼らは4つの人物の類型を提示する。要領が良く、環境にすぐ適応する人物、適応はうまくないが自分自身をうまく整理できる人物、感傷に揺れ、涙をよく流す人物、そして彼らを理性的に眺める冷徹な人物、これらの様に多様な生の類型は戦後の乱脈さを含め、提示するのに十分であった。「浮群」「裸像」「土窟」「板門店」「破裂口」等、初期作品の大部分がこのような若い世代の状況に注目した結果である。この作家は初期から戦後の現実状況をリアルに再現しながらも、その心理的推移と雰囲気を入れた点がもう一つの特徴であった。「달아지는 산들」(似ていく山たち)は特に一つの家庭が没落する痛みを反復する機械音と対照させ、現代社会の不安と倦怠と虚無を象徴的に提示するのに成功した。以上、現実的関心と心理把握という彼の2つの観点は後に世態小説の方に傾いていく。よく世態小説とは、日常的‘生’の表皮の観察にとどまっているという批難を受けやすいがこの作家の場合には小市民たちの心理状態が鋭く描き出されるために風刺的要素が濃い点が特徴でもある。

## 1950年代韓国小説の形成について

「副市長 赴任지로 안간다」(副市長 赴任地に 行かず)は社会風刺が色濃く、長編「小市民」は6.25直後の社会相を描写しながらも自伝的体験による心理推移に依存した。

徐基源が扱った若い世代は精神的崩壊と戦後状況という点で特徴を成す。「暗射地圖」は、戦後の精神的秩序が崩壊されていく過程で若い世代たちが持つ新しい風俗図を描いている。それは崩壊された秩序に対する反応ではなく、崩壊させねばならない観念に対する挑戦であり、実践であった。彼の人物たちは虚無と退廃的傾向を帯びている。彷徨する若い世代の姿を描き出したこの作品は彼を戦後派的な作家の一人として印象づけている。

崔仁勳はそれまでに感傷的な次元だけで取りあげられてきた分断問題を、ずっと論理的な次元に転換させた。「광장」(広場)は通念的な意味での失郷民に関する話ではなく、分断現実に対する知的把握であり、論理的な問いであった。それは南と北の状況を同じ小説の中に同視的空間で設定した点で可能になった。そして愛とイデオロギーを同質的な次元で接近させようとした点が説得力を得た。哲学科3年である李明俊には愛に対する問題と共にイデオロギーに対する結論も難解な問題であった。はじめ彼は愛がなぜ個人の感情ではなく、相対的な通路であるしかないという事を疑問に思った。するとその疑問はすぐ政治問題にまで拡大された。小説の中の彼は南と北の状況を同時に体験する。しかしそれが個人のイデオロギーに支配されている限り、どの方面にも自由な生存が不可能であるという事を悟る。南にも北にも意味のある生を探索せ出せないままに、ただ中立国に向かって行った彼がただ死の道を選ぶ事しか出来なかったのは、まさにこの点が分断の悲劇によるものだったからである。

## V

本稿がはじめから1950年代をある特定の時期に制限できたのは、この時期を解放以後、今日の文学が始まった期間だとみたためである。解放後、今日までの文学はもちろん、それが分断時代に向け、または戦後、西欧文学との新しい接点であったという点に特徴づけられる。1950年代はまさに今日の文学が始まる時期だという点で重要性を持つ。

時代が激変するだけ既成世代と新世代がその文学観を懸け隔てたのも、この時期の特徴の一つである。既成世代が反共理念を土台に民族主義文化論に立脚したのに比べ、新世代は戦後西欧文学精神を土台にした人間主義文学論を主唱した。これに注目したのも互いに違う2つの文学観がどのように対立、相反する仮定に触れながら、民族共同の文学として成長する事が出来たのかを確認するためである。

新世代文学は、一応反抗と拒否の精神を標榜した。それは人間精神の姿勢を意味するものだが、これは現実それ自体に目を背けたのではない。その反抗と拒否の精神が韓国の戦

後状況に出会った時、精神はより熾烈になるのだが新世代文学はこの点で価値を認められるようになる。

分断の悲劇はこの時期の文学の底辺に流れる共同の問題になった。休戦以後、徐基源、李浩哲、崔仁勲が登場し、この問題はより深化し、拡大される現状を見せ、その中でも崔仁勲は感傷的な次元にとどまっていた分断の問題をより論理的次元にまで、ひっぱりあげ、分断文学の一つの転換点としたと言える。

### 注

- (1) 1945年に解放された朝鮮半島は、米ソによって38度線を境に南北に分断される。そのうえ両大国の冷戦構造に組み入れられたため、文学も日本植民地統治による傷痕を克服する間もなく左右の対立に巻きこまれ、それぞれ別途の発展過程をたどる。韓国（1948年8月15日南朝鮮に国家として成立、正式国名大韓民国。）の文学は朝鮮戦争（1950～53年）直後から本格的に始動したとされる。
  - (2) 甲午改革（1894年に朝鮮南部で起こった農民反乱。）より日韓併合（1910年）に至る期間を開化期と呼ぶ。また、この変化に対応して登場した新しい形態の文学を開化期文学（新文学）と呼ぶ。
  - (3) 1945年8月15日
  - (4) 1950年6月25日朝鮮戦争勃発から1953年7月27日休戦協定調印までを指す。以下6.25は朝鮮戦争を指す。
  - (5) 1960年4月に韓国で起きた学生を中心にした李承晩政権打倒の大衆蜂起。
  - (6) 韓国の近代的精神と対立した位置において現代精神を形成し、新しい文学世界と新しい人間を探求している作家を新世代作家とする。  
金相善『新世代作家論』63頁 日新社 1982年 11月
  - (7) 50年代小説は通常‘戦後小説’‘分断小説’‘戦争期小説’‘戦争小説’と呼ばれてきた。しかしこれらの用語は強調点を異にした表現に過ぎず、60年代までは‘戦後小説’という用語を多く使用し、70年代以後、分断現実に対する認識が深化されながら‘分断小説’という用語をよく使っている。また‘戦争期小説’は素材的な意味が強く、50年代を包括するには、多くの問題点がある。本稿では便宜上50年代小説という用語を用いる。
  - (8) 1950年9月28日ソウル奪還を指す。
  - (9) 高麗、李朝時代の特権の支配階層を指す。元来は国家の公的会合における官僚の2列の並び方のことであり、東班（文官）と西班（武官）を意味する。
  - (10) 廉想渉「**한국의 현대문학**」『文藝』14号、1952年5月、11頁
  - (11) 干祥炳「**나는 거부하고 반항할 것이다**」『文藝』15号、1953年2月、81頁
  - (12) 金聲翰「往復書翰」（全鳳建先生貴下）から『文學藝術』3集7号、1956年7月、127～128頁
- \*引用文の漢字は、人名・題名を除いて常用漢字に改めた。

## 1950年代韓国小説の形成について

### 参考文献

- |         |                              |
|---------|------------------------------|
| 丘仁煥共著   | 「韓國戰後文學研究」<br>三知院、1995年4月    |
| 金字鍾     | 「韓國現代小説史」<br>成文閣 1982年9月     |
| 辛卿得     | 「韓國戰後小説研究」<br>一志社 1983年9月    |
| 조남현     | 「韓國現代小説의解剖」<br>文藝出版社 1993年4月 |
| 趙演鉉     | 「韓國現代文學史」<br>成文閣 1969年9月     |
| 金相善     | 「新世代作家論」<br>日新社 1982年11月     |
| 語文閣編輯部編 | 「韓國文藝事典」<br>語文閣 1988年5月      |